

スキーの本質は現代でも変わらない

人間とスキーの付き合いはとても古いもので、北欧では4,500年前のスキーの道具だろう、という木の欠片が発見されているそうです。雪で閉ざされた地域の人にとってスキーは欠かすことのできない大事な移動手段だったのでしょね。

スキーの技術が問われ始めたのは、現代スキーの娯楽的な要素よりも、もっと真面目な必然性があったからでしょう。

ヨーロッパ・スカンジナビア地方では、見渡すかぎり平坦な地を移動するための技術がノルディックスキーと呼ばれるクロスカントリースキーとそのスキー競技に。アルプス地方は山岳地帯が多く、国境線が山岳群にまたがるため、国境警備の必要性から登行や滑降の技術が進んで、アルペンスキーとその競技に枝分かれしたようです。

アジアでのスキーの歴史といえば、1800年ごろ（江戸・享和～文化・文政時代＝徳川幕府11代将軍・徳川家齊の治世）に、サハリン（旧樺太）原住民がスキーらしきものを使用していたとされる記述はあるものの、日本で普及が進んだのは、1900年を過ぎて明治後期になってからでしょう。

自分の足で歩き登り、自然の中に入り、自然と向



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然ガイドなどで活躍する人々をリレーしています。



5月の高根ヶ原付近（白雲岳を目指して）

き合って自由に楽しむバックカントリースキーは、前述の先史時代から発展してきたスキーのひとつであり、本質は変わらない、と僕は思っています。

近年、自然の中にとけ込んで自由な感覚を楽しみたいというスキーヤー、スノーボーダーが年々増加しています。新たに誕生する滑走テクニック、道具の進歩も素晴らしく、より快適なスキーを楽しむことが出来る環境が後押しもしてくれます。自然の山を気持ちよく滑るためには、技術や知識や体力、さらに経験も必要ですから日々勉強ですね。

ノマド店主 小畑 吾郎



朝プロフ (ピロフ)

国際交流員

ニグマノヴァ・ナルギーザ

先日、日本で初めて結婚式に参列しました。ウズベキスタンとの風習の違いはあっても、幸せな二人を参列者がお祝いする気持ちは世界共通ですよ。今回ウズベキスタンの結婚式などで行われる儀式を紹介します。

ウズベキスタンには、「朝プロフ」と呼ばれる儀式があります。普通、結婚式と追悼会（死後20日と1年後）の時に Rowe れています。

儀式の主催者は、日付け、時間を決め、親戚、隣人、知り合いに招待状を送ります。朝プロフ儀式が行われる前日の夜、「サブジ・トウグラル」（人参切り）という儀式も行われます。朝プロフへ招待される人数は、最低でも100人、多くなると500人程度にもなるのでプロフの材料も大量です。20〜50キログラムの人参を切るために親戚と隣人が手伝います。

その日、お客は早朝の祈りを読んで

から席に着きます。最初はパンと紅茶、次にリヤガン（大皿）に盛ったプロフを振る舞います。

1枚のリヤガンには2人前のプロフを盛ります。お客はプロフを食べ終わると主人にお礼を言いつて帰り、そして次のお客が来ます。このように数回繰り返し、全体の儀式は2時間ぐらいかかります。プロフは大量に作るので、招待客以外の近所の人達にも振る舞われます。

結婚式の際に行われる朝プロフの儀式には、アーティストや歌手が招かれる場合もあります。追悼会の時は静かな雰囲気の中で、コーランの章を読みながらプロフを食べます。朝プロフ儀式は、他のほとんどの儀式と同じく、参加者は男性のみであることが特徴です。

